

平成27年度 知事と県民の意見交換会概要

テーマ：経験者等から見た若者の県内就職・移住促進策

日時：平成27年7月1日（水）9：00～11：30

場所：東光鉄工株式会社

※意見交換に先立って、同会場にて、東光鉄工株式会社の成長分野への取組状況を視察。

(知事あいさつ)

日本全国どこでも、将来は東京でも、今のままだと人口が少なくなって大変である。秋田県は、大潟村を除いて将来無くなるのではないとも言われている。ただ、マイナスが続けばいつかはゼロになるという当然のことでもあり、あまり大騒ぎすることもない。

今、地方では、高齢化が進むとともに、若い人が減少すると、バランスが崩れて地域を維持することができなくなる。人口が減少したとしても、ある程度バランスのとれた年齢構成であることが地域を保っていくためには必要である。人口減少問題の対策は、国も都道府県も市町村も取り組んでいて、東京都でも一生懸命やっている。東京23区を中心以外は「田舎」がすごくある。1番過疎を抱えているのはある意味東京都である。

秋田県では、自分達の地域をどうやって保っていくか色々なプランニングしているところである。今、国からは、5年間で何をやっていくのか、ということを求められている。それだけで済むものではないが、そのときどきで色々な努力をしていく必要がある。

地域を維持していくためには、一定の経済力がなければならない。経済力がなければほかのところから助けてもらうことになるが、それだと地域の自主性も損なわれるし、地域の昔からの文化、伝統的なものも維持できなくなる。東京のように莫大な経済力を持つという意味ではなく、小さな地域では色々な経済のネタを探して生きていく、そういう取組が必要である。

高度経済成長期、かつては日本中に製造業が広がっていて、そこを中心に雇用の場が保たれていたが、今はその大部分が中国などに行っている。円安で戻ってきている部分はあるが、県内でも、そうした工場が戻ってきても、無人化されて戻ってきている。こういうときに、他所の力に頼るわけにはいかないので、自分達で仕事を作ること、航空機産業への参入のように、大きな製造工場での発展ということが一つには必要である。もう一つは、地元の小さな中小企業でも、今までのビジネスモデルをある程度変えていくことによって、時代に合わせて商売をする、そういう切り口もある。

今回は、移住定住というのもテーマだが、今、東京都の人にアンケートをすると、若い人の4割が将来的に田舎暮らしも良いだろうと考えている。単なるノスタルジーではなく、地方の価値を認めたい、地方で暮らしたい、そういう方も非常に多くなっている。

地域の人ではない人が入ってくることによって、今まで地域の中で常識と考えられていたことが、全く違った切り口でもって新たなビジネスモデルが生まれるということがよくある。地元の人には生まれたときからみているから、これは駄目だろうというともう駄目。全くよそからくると価値観が違うといった場合があり、そこにビジネスモデルを見つけて仕事に結びつけるということも可能になる。その地域で生まれた人の割合が少ないところほどその地域は発展する。そこで生まれた人が5割を下回ると、案外その地域

は発展する。同じ地域で生まれた人ばかりだと価値観が共有されすぎ、新しいものが生まれにくい。今様に
いけば、「若者」、「よそ者」、「ばか者」。これがよく言い当てている。地域で小さくまとまっているとどう
しようもない。企業の技術開発でも同じ大学の、同じ専攻の人を固めると良い物ができない。別々の大学
の同じ分野の人を入れると色々な面で活発化する。同じ教育を受けて、同じような考え方の人が集まって
も出てくる結論は一つ。大学が違うことによって、指導教官が違うため、同じものでも切り口が違う。そ
れによって答えがたくさん出てくる。県の研究機関を作ったときも、同じ大学の同じ学科の人で一つのチ
ームは作らせなかった。秋田でも外から来た人から新しい地元の良さを見つけてもらい、地域に刺激を与
えてもらって、地域の方も目が覚める、ということがあつたのでは、という思いである。

今日は日ごろ皆様様々な取組をされていると思うので、思っていること悩んでいることなど話してもら
いたい。行政がタイアップすることで良い結果がでることもあるし、県の政策としてやったほうがよいこ
とも結構ある。今年は「地方創生」に関連して各地域で意見交換を行う。各地で共通して出てくる課題に
ついては、政策として取り上げるヒントになるので、どうかよろしくお願ひしたい。

【参加者自己紹介】

(A氏)

北秋田市の山間部の集落に住んでいる。子ども四人と両親の三世代八人で暮らしている。鷹巣高校を卒
業して、石川県の金沢工業大学を卒業し東光鉄工に入社した。入社11年目でプラント関係の設計・営業を
担当しており、東京、大阪など県外にも仕事で出向く機会がある。

(B氏)

埼玉県出身で、秋田県内の大学を卒業し、昨年7月からニプロファーマ大館工場に勤務している。

(C氏)

秋田職業能力開発短期大学校住居環境科1年に在学している。ものづくりに対する興味を持っている。
住居環境科では、建築はもちろん、設計や建築基準法など法令の勉強もしている。

(D氏)

地元の高校を卒業して東京の大学に入った。東京での暮らしが10年位あつて、震災の前後に秋田に戻つ
てきた。妻と娘と旧鷹巣町で暮らしている。

(E氏)

旧若美町出身で、高校卒業後は移住が多く、東京、名古屋、ロンドン、東京と仕事をしてきて、秋田に
戻ってきた。フォトグラファーとしてフリーになったのは2～3年前で、現在は、県が発行している「の
んびり」のカメラマンの仕事などを行っている。これまで、ANAの機内紙の仕事や「KAMIKOANIプロジ
ェクト」のポスター撮影の仕事などにも携わってきた。

住んでいる根子集落は素晴らしいところで、ようやく定住できる場所が見つかったと感じている。家
も購入し、ずっとここで活動していきたいと考えている。

(F氏)

千葉県出身で、大館唯一の映画館をオープンさせて活動している。本業では主に千葉と東京で仕事をし

ていたが、たまたま出張で大館に来て、事務所を探そうとしていたところ、オナリ座と出会い今に至っている。これまで千葉県で長く活動してきたことから、大館に来て、良いところも悪いところもよく見えており、関東とは違う魅力も感じている。

(G氏)

生まれは東京の中野区。両親が秋田出身であり、祖父母の家に戻ってきた。中学校を卒業後、20歳ごろまでいわゆるフリーターをしていた。そうしていたところ、花善で跡継ぎがないということで秋田に来ることとなり、かれこれ20年ほどたった。花善では駅弁の「鶏めし弁当」を主に販売している。来た当初、大館はよそ者が受け入れられ難いところであったが、だんだんと住みやすくなってきたと感じている。子どもが三人おり、長男は15歳ですでに東京に行っている。一度外の空気を吸うというのは必要だと思うので送り出した。

(H氏)

高校卒業後、一度は都会をみてみたいと思い、東京で就職した。幸い両親の理解があり、一回出てみなさいと言ってくれた。東京ではバスガイドを約8年していた。職業柄、東京の地にとずっといるというわけではなく、東京から地方にお客様を連れて行き、その土地の良いところや歴史を紹介することが仕事だった。その過程で、自分の地元について、知らないことが多々あったのではと感じるようになり、それが大館に戻ってくる一因になった。戻ってきてからも観光の仕事に携わり、旅行会社で数年勤務した。旅行会社では他の地区に遊びに行ってもらい立場だったが、今は地元呼び寄せる立場で仕事をしている。大館市まるごと体験推進協議会では、移住定住はもちろん、外からきた客と地元の人どちらにも満足してもらいたいという観点で活動している。

【意見交換】

(A氏)

県外の大学に進学したが、在学時は秋田県の企業を知らなかった。県の就職合同説明会で現在勤めている会社など県内企業を知った。地元をいたとしても、家族や親戚が勤めている会社などしかわからないと思う。ましてや県外に居たので、いざ仕事を探すとなったときに地元の企業がわからず、苦勞した。求人募集を行っていない企業でもよいので、地元の製造業の情報などをインターネットで調べられたらよいのではないか。

(知事)

できれば地元で就職を、という気持ちは。

(A氏)

県外の大学に入るときも、そのときも地元に戻ろうという気持ちはあった。説明会のような機会がなければ、また、今の会社に落ちていれば、東京で就職していたと思う。通っていた大学は中央や大阪への就職が多く、大学側も就職支援には熱心で、バス運行などの支援してくれていた。説明会に出られなくても、インターネット上で検索し、パンフレットなどを一覧で見られるようなものがあればよいのでは。

(B氏)

今勤めている会社は、大学への説明会に来てくれたことがきっかけで知った。それまで秋田の企業に就職するという考えはなかった。自分の通っていた大学が、県立の大学でありながら秋田の企業への就職実績が少ないことが悩ましいところだと常々聞いていた。そんな中、今の会社に出会い、話を聞いているうちに、就職して秋田に恩返しができるのかな、という気持ちになった。

また、今の会社は、自分の出身地である埼玉にも工場があるので、将来的に秋田県と出身地の両方に貢献できるかもしれないということもあった。やはり県内企業を知る機会がなかなか無いので、一覧のような探しやすい仕組みや、県内企業が協力して呼びかける機会などがあれば良いのでは。

また、説明会のときに、大学のOGから今の会社の話を聞けたことも良かった。大学のOB、OGが訪問してくれるというのも企業の実態を知ることでは良いのではと思う。

(C氏)

通っている学校はそろそろ進路を考える時期。地元の大館に残るのか、秋田県内か県外か。また、北海道、宮城の系列の学校に進学するのかなど。まだ、地元の大館や県内の企業がどんな仕事をしているのか全然わからない。

高校卒業のときにも就職することを検討したが、地元で行われた企業説明会で話を聞くまでは、どんな企業がどんな仕事をしているのか本当にわからなかったのも、そのような機会がもっとあれば良い。また、企業の求人票をみると、女子が就職できる環境が整っていないと感じる。結婚して子どもができれば辞めないといけないという企業が多い。

また、自分が県外に出たとして、秋田に戻って就職したいと思ったときに、地元のサポートが欲しいと思う。

今の学校は就職へのサポート体制があり、企業が訪問に来てくれる。県外からも来ている。そうした機会は大事だと思う。

(D氏)

東京の大学に進学して、23歳で帰ってきた。東京で就職するか、自分の会社で働くか選択肢がいくつかあった。東京暮らしが長く、最初はギャップがあって、何てつまらないところに帰ってきたのか、というのが最初の感想。会社は木材、住宅に関する製造業のため、取引先は全国で、また海外との取引も多くあるので、それならば秋田でも同じか、ということで折り合いを付けた。

会社として、東京に事務所をつくらうということになって、26歳位のときに東京に行った。30歳のときに震災があって、そのときにまた秋田に戻ってきた。結婚したのもそのとき2011年4月。東京と秋田を二回往復してきたので、良いところも悪いところも理解しているつもり。余談だが、妻は広島市出身で、子どもは三歳。秋田と西日本とでは、食べるものの味付けなど常識が全く違う。日々の会話の中で、地方がどうしたら良くなっていくかいつも考えている。

雇用が少ないことは、会社を運営している自分たちも責任を追う立場にある。外からきて定住された方も地元の方も、安心して働いて生活の基盤を作っていけるような、当たり前のセーフティネットがもっともっと活発にならないと若い人も減っていく。地元に残って果たしてやっていけるのかと考えるところがあると思う。県として、民間として、そうした先立つものをしっかりさせて、もっと良くしていきたいということ进行全面に出していくことが必要なのでは。会社としても、もっと雇用を増やしていかなければと思う。

仕事を抜きにした話をする、この前初めて白神山地に行ってきたが、素晴らしいところで、こんな良

いところはないと思った。地元の人が、地元の良いところを再認識して、PRすることが大事。自分が東京にいたときのほうが、角館の桜や白神山地のPRを目にする機会が多かった位で、地元でのPRをもっと全面に出して欲しい。

子育てについては、三歳の娘がいるが、東京にいる姉と比べても二人目に対する助成等は手厚く、割と満足している。仕事が大丈夫であれば子育てはし易いと感じる。

(知事)

ハローワークからは、高卒採用の情報は各学校に相当細かく伝わっている。大学については、県内大学には情報が伝わっているが、県外の大学生に採用の情報を伝えることがなかなかできない。実は個人情報保護法ができるまでは同窓会名簿のルートを使った情報提供もあり、まだ良かった。確かに、県外の大学生に向けた県内企業の情報は非常に少ない。多くの企業は、大卒の求人は直接大学に出すため、ハローワークに出していない。大学1、2年生に向けて、秋田にこういう企業がある、といった情報提供はまだまだ不足しており、課題の一つ。

秋田県の保育料は確かに日本で一番安い。一人当たりの子育てに対する行政の補助は秋田が一番多い。地元でずっといるとそれが当たり前になってしまうが、よその人から見ると、割と良いな、と感じると思う。

観光については、県南と県北の観光に対する取組がすごく違う。例えば温泉だが、乳頭では、温泉の女将さん達の宣伝活動がすごい。韓国ブームがあったときは女将さん達が韓国語を習った。今は台湾に一生懸命行っている。市町村長によく言うが、県北は観光振興の動きがみえない。国民文化祭のときに、仙北市では、「美人」100人が銀座で行進する、ということをやった。「美人」は自称で良い。それは行政の補助ではなく、自費で行っていた。

県北は地元の動きが少ない。祭に関しても、綴子大太鼓など大きな祭があるが、見学にきても見られるのかどうかわからない。大館神明社の祭りも秋田市でポスターを見たことがない。県南では、湯沢の犬っこ祭り、絵どうろう祭りは秋田市でビラ配りをしてPRをしている。

観光に関しては、県北はこれからだと思う。立派な観光地でなくても、来てもらって、色々な評価をもらって、文句を付けてもらって、自分たちで改善し、だんだん良くなっていく。そうしたことは県北も是非やって欲しい。最初から立派な観光地はどこにもない。観光は、実際にお金を使ってもらう土産物屋であったり宿であったり、そうしたところの動きがないといけない。そうした意味では地元の連帯がやや少ないのかなと思う。函館までの新幹線延伸などは県北にとって一つの機会。こうしたことに対しての地元の取組がもっともっと欲しい。

日本人の観光客は30年後に半分になる。それを補うのが外国人。北秋田市まで台湾人が観光に来ている。青森空港にもきているが、これを呼ぶためには、大館がちょうど中継地になる。大館市長に「自分が行って売り込まないと」と伝えたところ、台湾に行くことにしたとのこと。

就職の情報については、皆さんがおっしゃるとおりでまだまだ足りない。県外の大学生に対する情報提供についても取り組み始めたところであり、これからも力を入れてやっていく。

(E氏)

大学を30歳で卒業し、そのときに東京でずっとカメラマンとして活動していくのか考えた。秋田に帰りたいたいという思いは持っており、ロンドンに行ったときにその思いが強くなった。日本の良いところは何か聞かれて答えられなかったことがあり、そこで考えてみたとき、「秋田のことなら知っている。知ってい

るが、まだまだ足りない。」と感じた。そして、大人になった自分が秋田で何を感じるか、改めて見直したいと考えた。

秋田で何かできないか考えたとき、ちょうど大館で「ゼロダテ」が求人を出しており、それに申し込んだ。「ゼロダテ」では主に北秋田市で活動し、マタギ、根子番楽など、山の文化の奥深さに惹かれ、住み始めることとなった。県のフリーマガジン「のんびり」のカメラマンをするようになり、今まで見えなかった豊かさを感じるようになった。「のんびり」の編集には、東京に行って戻ってきた人や県外のメンバーも結構おり、県外の人にも伝わるような編集をしている。ただ、県内の人々が「のんびり」をあまり知らない。「のんびり」から自分は豊かさを学ばせてもらっており、これが県のPR紙だと思っている。豊かさの質とか価値観は人それぞれ違う。マタギ、根子番楽など、自分も20代前半だったら豊かさを感じず見過ごしていただろうと思う。PRの仕方は難しいとは思いますが、それでもやらなくては行けない。森吉山丸ごと観光プロジェクトにも関わっているが、これまで観光が根付いてこなかった北秋田で、これから盛り上げようと思ってもなかなかできない。地域で聞き取りをして、10年、20年先どんな地域になってほしいかという話をしても、発展的な話が聞こえてこない。行政も腰が重い。しかし、若くやる気のある人が多く、少しずつ進んでいっている。あとは地域の人をどうやって巻き込んでいくか。

移住については、自分が住んだときには市の支援はなかった。この4月からは、奨学金返済に関する補助、空き家購入に関する補助などが始まった。ただし、難しいと思うのは、補助金は一過性のもので、あとはその人がその土地に住みたいと思うかどうかであること。だからPRが大切。県内外の人に伝わるように、見せ方を工夫していかないと難しいと思う。

(F氏)

映画館をやっているの、文化の面でお話したい。この地域で、Eさんのようなアーティスト、デザイナーなどの方で、一生懸命やっている人は結構多い。大館の「ゼロダテ」さんなど、文化活動をしている人もいる。大館市もそういった活動を援助しているなど、よく動いてくれている。それをもっと宣伝しても良いのでは。

関東からこちらへ来て感じたことは、新聞、テレビなどのメディアがよく活動を取り上げてくれること。地元のローカル紙があり、結構取り上げてもらった。関東では人口も多いしネタも多いので、大手はもとより、地元新聞などでも小さな企業の取組はなかなか取り上げてくれない。その点では活動し易い、宣伝し易いと思う。そういうことを地元の人は普通に利用している。そこは魅力の一つで、そこをアピールして良いのでは。

あとは、地震、災害の少なさ。地元の人には気付かないかもしれないが、大館地区は全く揺れない。雪で大変な面はあるが、秋田は安全。もっとPRしても良いのでは。

(G氏)

「ゼロダテ」にはその名前ができる前から関わり、今は「ゼロダテ」のNPO法人の理事をしている。Eさんがこちらに来たときは実行委員長をしていた。当時、緊急雇用制度で10名を雇用していた。緊急雇用は1年限りの制度であり、今年4月からは2名の体制で活動している。そのスタッフも非常に不安を持ち、今年は何の補助が使えるか、今年の給料はいくらなのかということに気にながら運営している。オナリ座の建物も「ゼロダテ」で一時借りたことがある。「ゼロダテ」の活動資金は厳しくなっているが、だからといって、アートとお金をつなぐことはなかなか難しい。

観光振興としては、大館は資源がありすぎるくらいだ。世界を代表する秋田犬、あとはきりたんぼ、曲

げわっば、比内地鶏。一県でもこれだけあれば十分、というだけのものを大館市は持っており、魅力はあるし、また、更に魅力を深めていっていると感じる。

就職の話については、中小企業の採用側の本音としては、若手よりも即戦力を求めているのが実情ではないか。高卒、大卒の方を採用して育てていきたいという思いはどの企業もあるが、ほとんどの中小企業は余裕がない。

当社では、一昨年、ドロップアウトの人を2名採用した。今19歳だが、自分自身が中卒だったことを反省し、子どもさんがいる1名は定時制高校に通わせているし、あと1名のほうも午前2時からの勤務で一生懸命働いている。こういった人を支援するのも企業の役目と考えている。

経営者からみると、商工会議所とハローワークが求人要請など同じことをやっていて、両者が訪問して同じことを聞くなど、無駄なことをやっていると感じる。ハローワークがやるのはわかるが、商工会議所は大卒採用に絞って情報収集をするなど、分担したら良いのでは。

駅弁業界の理事も勤めているが、駅弁の業界はどうしてもパートタイマーが多く、中でも秋田は表に出ている数字以上に賃金が安い。金沢は新幹線もあって特別だが時給1,500円、秋田市は800円。福島も、特殊な地域ではあるが1,400円。東京は1,200円、山形は900円、岩手は850円などである。経営者としてはあまりお金が出ると大変だが、移住する立場としては、もっと賃金がアップしないと移住しても生活できないのでは。移住していきなり正社員で勤められる方はそう多くなく、パートタイマーで働いてから、その後色々探して正社員として就職するといったこともあると思うので。

(H氏)

他地区の人から大館を知ってもらおう、という活動をメインに頑張っている。大館に来てくれた人が、地元で「大館にはこんな良いところがあるよ。」と伝えてくれる、大館の宣伝リーダー的な役割を担ってもらえるように、大館に来くれた人への受け入れ態勢については、常日頃心を配っている。

オナリ座の話で、映写機があるのは、東北で二か所という話もあったが、そうした地元にながらも知らないことが多い。地元の人が地元を知らないというのが、観光のマイナス面になっていると思う。地元の大人が地元の良いところを知らなければ、子ども達にも伝わっていかない。子どもはプラスよりもマイナスの方を取り入れてしまう、という傾向があるので、まずは、地元の人に郷土愛を持ってもらうことから取り組んでいきたい。移住受け入れの前に、地元の人が外に出て行かないように、まずは「定住」についてしっかり取り組みたい。地元の人が地元のことを知ることが1番大切であると、活動に取り組んできて感じている。

定住するに当たっては、自分は子育てしながら仕事をしているが、女性が子どもを育てながら仕事をしていくのはやはり難しいと感じる。他地区から来た人は、秋田は充実していると話す、もう少し待機児童対策などが進んでくれば、もっと仕事の幅も広がるのではないかと。

ほかには修学旅行の受入にも取り組んでおり、札幌、仙台から受け入れている。農家に宿泊受け入れをお願いしており、一週間後に両親を伴って再訪してくれた子供もいる。良かったと言ってもらえるのはまずは「人」ではないかと思っている。また、多くの人に訪れてもらうことで、受け入れる側も元気になる。そしてまた、地元を発信していくことで多くの人に足を運んでもらえるのではと考えている。なかなか思うようにはいかないところもあるが、悩みながら、楽しみながら今は活動している。

お試し移住に関しては、子供連れで来る方も多く、秋田は教育が良いといわれていることから、どんな学校があるかといったことや、病院や子ども達が遊ぶ施設はどうなっているのかといったことに関心があるようだ。婚活支援の取組に関しては、首都圏から来られた方は「大館はあたたかい。」と皆さん話す。

(知事)

「のんびり」も実は風前の灯火だったが、私が続けようと言った。「のんびり」は県外向けに作っており、非常に好評。「のんびり」のようなものは、2、3年やって急に移住者が増えるとか、そういったイメージでとらえるべきものではない。ずっと続けていくことによって、地域の思いとか、秋田の感覚、雰囲気、そうしたものが少しずつ広がっていくことで、色々な面でプラスの効果がある。秋田の人は意外とすぐに結果を欲しがり、毎年、いくら費用をかけてその結果移住者が何人増えたのか、というような議論になるが、すぐに結果が出ることなんて世の中にそうそうない。東光鉄工さんのドローンでも、すぐに、いくら費用をかけたのか、何台売れたのか、何人雇用が増えたのか、という話になるが、情報量が少ないから短兵急にそういう話になる。自分としては「のんびり」は続けていきたいと思っている。

また、オナリ座はどういう頻度で上映しているのか。どういう方が見に来るのか。

(F氏)

毎週、金土日が上映日で、3分の1は県外客。その県外客の3分の1が、関東からの客。

(知事)

クルーズ船に乗船すると、船内では、古い映画の上映に意外と人が集まる。オナリ座のような、アナログの映画館は、大館の他の色々なものと組み合わせれば、大きな一つのネタになるのでは。

「ゼロダテ」の活動で、久々に大館の名前が全県的に出てきたが、緊急雇用制度は恐らく来年から無くなる。元々国の制度であり、有効求人倍率が非常に悪かったときにできた制度。現在、求人倍率は非常に高くなっており、秋田も1.06倍である。今後の活動をどうしていくかだが、行政頼みでは無理だと思う。

給与条件については、地元企業も危機感を持たなければいけない。首都圏が今非常に求人難であり、大きな製造業でなくても、求人を求めて首都圏の中小企業の地方移転の話がどんどん出ている。我々もできるだけ地元の子どもを外に出さないようにと考える。企業誘致を考えた場合、例えば情報産業などはどこにあっても良い。地元の高校と提携できるのであれば事業所を移すと考える企業もある。ただ、全体として雇用の場が増えて非常に良いことだが、そういう企業は給与水準が非常に高いことから、地元の中小企業と人の取り合いが始まるといったこともある。これからは、就職先がなかったという時期とは逆の形になる。

バブル期、年間十何件の誘致企業あり、地元企業が人を採用できないことから、県外からの誘致をストップしろという話までであった。来るというものを拒むわけにいかないのもそれはできないが。

商工会議所なども危機感を感じなければいけない。これまでとは逆の意味の競争が始まるので。

(G氏)

県では、外国人の定住・移住促進について進めているのか。

(知事)

これについては、国が禁止事項としている。国の法律、政策なので都道府県ではできない。ただ、福祉関係では、一定の枠のなかで社会福祉協議会がやっている。湯沢のある施設では、介護の補助のような仕事で東南アジアから人が来ている。ドクタークラスの研究者など特別な技術を持った方を除き、他の職種の一一般の労働者は、就労ビザで来てても定住はできない。県では福祉関係だけでも制度を広げられないかと

ということで、国に特区申請をしたが却下された。

あとは、待機児童についてだが、県内に待機児童がいるのは秋田市と大館市。

(H氏)

大館市は、第二子を産んで育児休暇に入ると、第一子は保育所を出ないといけない。市町村によって全然違う。

(知事)

制度は市町村によって違う。秋田市では今の市長が施設を増やして待機児童を少なくした。

修学旅行については、JRでは、新幹線で青森まで来て、そこから五能線を使って秋田に入ってもらった戦略をメインにしている。県北は観光の提携が非常に弱い。他地域では協議会を作って一体的に取り組んでいる。こちらの観光協会でもやって欲しい。

地方創生に関しても、市町村間で差が出ている。例えば、プランニングを全てコンサルタントに任せてしまうのはどうなのか。やはり役所の職員が自分で計算してやらないと。そうしたことから、地元の人が地元を知らないということになる。情報が頭に入っていないから、「(地元には)何も良いところがない。」となる。今の子どもたちは学校でふるさとのことも結構学んでいるが、60代から上の人間が逆に駄目。戦後は食うや食わずで、地元のことを学ぶという余裕がなかったということもある。皆さんの年代が刺激して、地元を愛着をもった人を増やすというのが必要かと思う。

Bさんの大学へ入学するときの志望動機は。

(B氏)

埼玉県の中でも田舎の出身なので、都会ではなく山に囲まれたところで過ごせたら良いと考えていた。入学前の1月に、見学で秋田に初めてきたとき雪がとってもきれいで、この環境で落ち着いて勉強できるのは良いと思った。また英語が好きで、将来は英語を使って仕事がしたいと考えていたので、その条件に合う大学を志望した。ニプロでは海外企業とのやりとりがあるので、そこで翻訳の仕事などに関わっている。

(知事)

Cさんは将来についてどんなことを考えているか。

(C氏)

建築の現場監督の仕事をしたい。実際の施工に関わって安全な家づくりの仕事をしたい。建築関係は今女性がすごく多い。大館が好きなので、地元に残りたいという希望はある。

(司会)

Fさんは雪はどうだったか。これから関東から移住する人にとってやはりハンディキャップになるのか。

(F氏)

千葉では雪が降るのは年に一回か二回。降ると建築関係の仕事は全部休みになるが、こちらでは普通に仕事している。雪は付き合い難いと思う。大館は、最初の年に社員六人できたが、みんな事故を起こし

た。2年目からはそういうこともなくなったが、普通の人はやはり雪は厳しいのでは。映画館では、去年の冬、除雪のためブルドーザーを借りて作業をしたりした。

(司会)

最後に、この地域や秋田県が、これから魅力的な地域になっていくためにどんなことに力を入れていったら良いのか、また、自分だったらこんな将来像を思い描く、といったことについて、もう少し幅広く御意見をお話いただきたい。

(D氏)

自分自身仕事で海外と接することも多く、中でもヨーロッパが多い。そうして仕事をするなかで、当社では規模を迫る経営は行っていない。バランスを保ちながら、小さくなって行くことは恥ずかしいことではないということはみんな思っていて欲しい。

秋田は、現状ではまだワンオブゼムの一つであり、他県と違いはない。もっとオンリーワンを突き詰めて外にPRしていくことが必要だと思う。子供の教育が素晴らしいことなど、秋田ならではのことを特化して突き詰めていくのも良いのではないか。

よく話すのは、大館能代空港をハブ空港にしたり、北秋田市にカジノでもできたら面白い、といったことなど。今の時点ではありもしないことだが。

外から来た人に面白いと思ってもらえるようなことを、自分の仕事も含めてやっていきたい。外から人を呼びたいという思いで、活発にみんなが全面に出て、押しつけがましいくらいやってちょうど良いのかなと思う。

(B氏)

外から見ると地元の人から見ると目線は違うので、両者が一緒になったコミュニティを作って、イベント運営、情報発信をしていくようなことをすれば、若者の力でもっと秋田を広めていけるのでは。

県外出身でこちらに就職し、こちらの友達も少ない。若者は、今はつながりを求める傾向があると思うので、まずは人間同士のつながりがあって、そして集まった人が外へ向かって情報発信していくということを、インターネットやSNSを使ってやっていくことが必要ではないかと思う。

(C氏)

大館は、イオンスーパーセンターなど活気があるところと、そうでないところとの差が激しい。ハチ公小径のようなところもあるが、やっているかどうかもわからないような状況。作るのであれば、何年も活用していけるものを作って欲しい。また、秋田市や大館市などが一体になって元気になっていければ良いと思う。

スポーツ人口も減っているが、スポーツの都市としても発達して欲しい。県立プール、こまちスタジアムなど設備の良い施設がたくさんあるので、どんどん活用して、人が元気で、明るい秋田になれば良いと思う。

(知事総括)

若い年代層の方は割と地元に対する悲観論がない。かつて、この意見交換会は、市町村長や団体の長の方の話聞いていたが、全て県に対する補助などの要望だった。皆さ

んは割と将来に対する悲観論がなく、問題意識、希望を持っている。なぜ、年配者が駄目だ、駄目だと言うのか。そこだと思う。

それと秋田犬はすごく有名。大館だと秋田犬をもっと全面に出して欲しい。例えば、犬十頭を連れて、銀座を歩くなど。忠犬ハチ公なども、扱い方がまだまだ下手。大館の「長」の付く人や議員が、半被を着て渋谷のハチ公を掃除するなど、そんなパフォーマンスはどうか。普通の人やってもニュースにならない。上に立つ人が全面に立たないとニュースになりにくい。若い人たちだけで動いてもなかなかニュースバリューがないので、その人たちを皆さんがつついてあげたら良いと思う。比内地鶏と秋田犬の話題づくり、これは徹底してやったほうが良い。

観光振興についてはどの地域でもやるというが、何をターゲット、決め手にするのか。豊かな自然や人情、というのでは、地方はどこでも同じ。東京でも多摩に行ったら秋田よりすごい自然がある。とんがった部分をどうするか、若い人にやっていただきたい。また、皆さんの力で、年配の人達を動かしていってほしい。

(終了)